国際基督教大学における教育環境調査の試み

原　一　雄
牧野文恵
松村治子
村山興子
島田博美

序　論

何時，いかなる時代にあっても，また国公立と私立の如何を問わず，高等教育機関は，国民ならびに国際社会の負託に応えて研究と教育の機能を存分に発揮するために，絶えず学外からの助言や批判を謙虚に受けとめなければならない。同時に，それにもまして，自ら卒直に自己評価を行ない，進歩改善への実践的方策を自主的に探らなければならない。

われわれは，国際基督教大学（ＩＣＵ）における総合評価の試案を作成し（原他，1969），一連の調査研究を続けてきた（岩瀬他，1969；土屋他，1970；原他，1972； Troyer 他，1976）。ここに報告する調査は，上述の主旨に基づく研究の一環として，　1977年度卒業論文演習における共同研究課題に取り上げたものであり，４名の学士論文の基礎資料に当たる部分である（牧野，1978；松村，1978；村山，1978；島田，1978）。

研究の歴史的概観

高等教育機関の環境評価に関して，Pace, C. P. & Stern, G. G. (1958) は，大学をとりまく文化を，個人の欲求とそれに対応している環境圧力との複合であると考えた。そして先ず最初，Murray, H. A. (1938) の欲

求-圧力モデルに基づく The College Characteristics Index（ＣＣＩ）を作成した。

ＣＣＩは大学の環境の特質を30の尺度で評価する。これらの尺度は，Murray の欲求-圧力の概念から導かれた Activities Index（ＡＩ）の中に含まれる30の性格欲求尺度に相応するものとして考察された。すなわち，１個の有機体としての環境は，様々な性格をもつ個人の集団の構成に類似した型をとるであろう。従って，ＣＣＩの30の環境圧力の尺度も，ＡＩの30の性格欲求尺度に対応するはずである，と仮定された。しかし，その後の数々の研究結果は，この両者が必ずしも対応するものではないことを示し，有機体としての環境は多様な性格をもつ個人の集団と異なる構成であることが明らかになった。そこで，Pace は最初の仮説を捨て，大学の環境を構成するいろいろな変数は，個人的性格の要因と考えられる心理的内容ではなく，そこで機能している教育的内容によって定義されるべきものであるという仮説を立て，この考えに基づいてＣＣＩに因子分析による検討を加えて，College & University Environmental Scale（ＣＵＥＳ）を開発した（Pace, 1969）。

以上の如くＣＵＥＳにおいては，ＣＣＩとは異なり，教育的な内容による構成が試みられている。すなわち，ＣＣＩに用いられた30尺度，各10項目，計300項目を，大学生活について新しく設けた５領域，各30項目，計150項目に再構成した。これらの項目を選択・削除する過程において，Pace は先ず第１に，ある大学の雰囲気が他校と相違する点を示すことのできる領域ないし次元を明らかにし，第２に，環境間の相違を最も明確に反映させる質問項目によって，これらの領域を測定する，ということに重点を置いた。ここに用いられた領域は，Ⅰ（Practicality），Ⅱ（Community），Ⅲ（Awareness），Ⅳ（Propriety），ならびにⅤ（Scholarship）の５つであり，それぞれの特徴は下記の通りである。

領域Ⅰ，Practicality：ここに含まれる項目では，大学の環境の内，諸々の組織，個人的地位，実利などの実際的な面が強調され，組織の中で適

応した生活を営んでいくための管理運営上の諸制度と縦横の人間関係，規律と社交などが示される。この Practicality に相対する概念としては Bureaucracy が挙げられる。

領域Ⅱ，Community：この領域を代表する項目は，親しみがあって団結力のある，集団志向的キャンパスを表わす。この Community に相対する概念は Family である。

領域Ⅲ，Awareness：ここでの項目は，自己理解，自省心，自我同一視などの個人的側面と，芸術一般に触れる機会の有無などの審美的側面と，世界状勢や人類の福祉などの政治的側面への関心度を表わしている。

領域Ⅳ，Propriety：ここに含まれる項目は，礼儀正しく思慮深い行動が評価される環境を示している。

領域Ⅴ，Scholarship：ここには学問的な雰囲気を表わす項目が含まれる。すなわち，学術研究に対する真摯な興味と研究成果を挙げさせる意欲に関するものである。

本研究の目的

本研究においては，上掲の Pace のＣＵＥＳを基に，わが国における教育環境調査用紙を作成し，それを用いて，ＩＣＵの在学生が，ＩＣＵの教育環境をどのように認知しているのか測定することを目的とする。

ここでいう「環境」とは，単に行動的反応を引き起こす，いわゆる外的刺激としての物理的・地理的・生態的属性の集合を意味するものではなく，諸々の教育活動に参加し，その機能の意味を個人の体験を通して再構成させていく認知的次元の形態を指す（原，1979）。

従って，同じＩＣＵの学生であっても，個人個人によってＩＣＵの教育環境の評価は一様でない。本研究では，特に，学生個人の属性の差による評価の相違を明らかにしたい。すなわち，具体的な作業として，次の調査項目が挙げられる。

1．ＩＣＵの教育環境を全体的に測定・評価すること。

2．性・学年・専攻・宗教・住居・課外活動・受験時の志望・卒業後の進路・海外在住経験などの異なる下位群間で評価を比較すること。

方　　法

調査期日と被調査者

本調査は，ＩＣＵ教養学部全学生を対象とし，1976年９月９日，第二学期登録日に登校した教養学部学生の内，日本語を正しく理解できると判断された学生1335名に，後述の調査用紙（ＪＵＥＥＳ）と個人用記録用紙を配布し，10月３日までに回答するように依頼した。

調査用紙

日本の諸大学の教育環境を評価するため，前述のＣＵＥＳを基にして次のような質問紙が作成された。

まず，ＣＵＥＳに含まれる５尺度，各30項目，合計150項目の質問を日本語に翻訳し，U. S. A. と日本の大学における文化的差異を勘案して，意味が不明確ないし回答が困難であろうと予想される項目を除いた上，５尺度（領域Ｉ～Ｖ）それぞれ15項目，計75項目を選び出して，本研究のための調査紙「大学教育環境調査・日本語改訂版（Japanese University Educational Environmental Scale，略称ＪＵＥＥＳ）を作成した。

ＣＵＥＳでは，回答方法に True-False 法を用いているが，ＪＵＥＥＳでは回答の傾向をより詳しく把握するため，次の４段階尺度を用いた。

＋＋	強く同意する場合	（４点）
＋	多少とも同意したい場合	（３点）
－	いささか同意しがたい場合	（２点）
－－	全く同意できない場合	（１点）

調査用紙にはＪＵＥＥＳの外に，調査の依頼状，個人用記録用紙，回答の仕方の説明などが含まれている。個人用記録については，被調査者の

身上について11問の質問を設け，資料の整理ならびに今後の連絡の都合上，記名することを求めた。

個人用記録および JUEES への回答はすべてコード化され，ICU 計算センターのコンピューター，IBM 370 によって処理された。個人用記録については，各項目ごとに回答全体の分布が出された。JUEES については，4段階尺度の＋＋を4，＋を3，－を2，－－を1のように点数化し，これによって個人の5領域ごとの平均と偏差得点（Tスコア）が算出された。さらに，個人用記録の項目に従って全回答者を幾つかの下位群に分け，JUEES の5つの領域ごとに偏差得点の平均と分散が求められ，群間の比較には t 検定が用いられた。

結　　果

回答率

前記調査期間中に調査用紙の回収を行った結果，配布総数1335の内，回収数は 624 であり，従って回収率は48.1%であった。学年別回収率を比較すると Table 1 のようになる。また，全回答者を個人用記録により下位群に分類すると，その内訳は Table 2 のようになる。

Table 1. Number and Percentage of Questionnaires Returned

Year	Distri-buted	Returned	%
Fr.	352	165	46.9
So.	302	119	39.4
Jr.	388	156	40.2
Sr.	205	159	77.6
Sr.+	88	43	48.9
Total	1,335	642	48.1

Table 2. Number and Percentage of Responses in Each Subgroup

Subgroup	N	%	Subgroup	N	%
Sex:			*Residence*:		
Male	242	37.7	Home	321	50.0
Female	398	62.0	Lodge	187	29.1
n. a. *	2	.3	Dormitory	108	16.8
Year:			Others	16	2.5
Freshman	163	25.4	n. a.	10	1.6
Sophomore	120	18.7	*Extracurricular Activities*:		
Junior	149	23.2	Club	253	39.4
Senior	149	23.2	Dokokai	94	14.6
5th & above	45	7.0	Others	26	4.0
Grad. Schools	14	2.2	None	201	31.3
Others	1	.2	n. a.	68	10.6
n. a.	1	.2	... ...		
Major:			Sports	194	30.2
Humanities	113	17.6	Cultural	153	23.8
Social Sciences	141	22.0	n. a.	295	46.0
Natural Sciences	63	9.8	*First Choice at Admissions*:		
Languages	224	34.9	ICU	341	53.1
Education	87	13.6	Other Univ.	246	38.3
Grad. Schools	13	2.0	n. a.	55	8.6
n. a.	1	.2	*Plan after Graduation*:		
Nationality:			Job	282	43.9
Japanese	633	98.6	Grad. Studies	82	12.8
Non-Japanese	6	.9	Undecided	266	41.4
n. a.	3	.5	n. a.	12	1.9
Religion:			*Oversea Living Experience*:		
Christian	97	15.1	None	445	69.3
Buddhist	71	11.1	Less than 6 mon.	64	10.0
Shintoist	4	.6	More than 6 mon.	127	19.8
Others	14	2.2	n. a.	6	.9
None	423	65.9	*Total*:	642	100.0
n. a.	33	5.1			

* n. a. : No answer.

平均得点の分布

各領域ごとの平均得点の度数分布を示したのが Fig. 1 である。また，それぞれの領域における全被調査者の平均ならびに標準偏差は Table 3 に示される。

次に，各下位群ごとに，各領域別Tスコアの平均値を示すと Fig. 2 (a～j) のようになり，さらに領域ごとに下位群間の平均値の差の検定を行った結果は Table 4 に示される。

Table 3. Mean and Standard Diviation in Each Scale

Scale	Mean	SD
I. Practicality	2.16	.27
II. Community	2.26	.34
III. Awareness	2.29	.30
IV. Propriety	2.49	.30
V. Scholarship	2.45	.33

考　　察

調査方法について

本調査における回収率 (Table 1) は，これまでにＩＣＵで施行された質問紙による調査に比較して非常に高いものであった。通常，回答を阻むと考えられる記名を要求した質問紙であったにもかかわらず，このような高い回答率が得られた理由は，従来ならばメッセージボックスを通して行なわれるものを，今回は共同研究者が手分けして，学生全員が登校する登録日を選び，被調査者一人一人に協力を求めつつ調査用紙を手渡し，且つ，回収を確実にするため被調査者のＩＤNo. を控えたためであろう。

学年別に見ると，４年生の回収率が77.6%と抜きん出て高い。これは筆者たちのうち４名までが４年生であり，顔見知りが多く，また，卒論研究をするという同じ立場からの協力が得られたためと考えられる。

全学年を通じて，ほぼ同数の調査標本が得られたが，ＩＣＵでは男女ほぼ

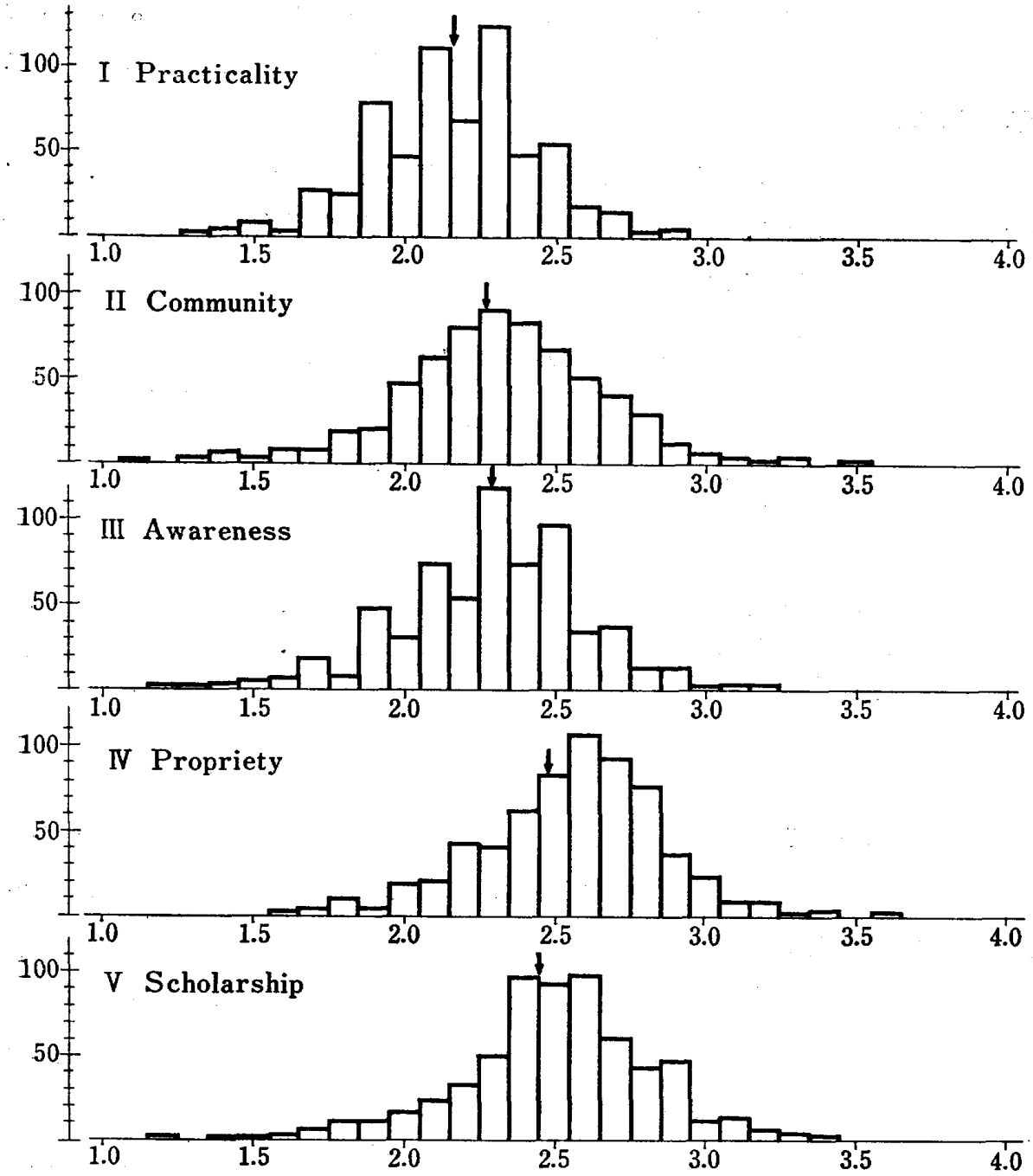

Fig. 1 Frequency Distribution of Mean Scores. (↓ : Overall Mean)

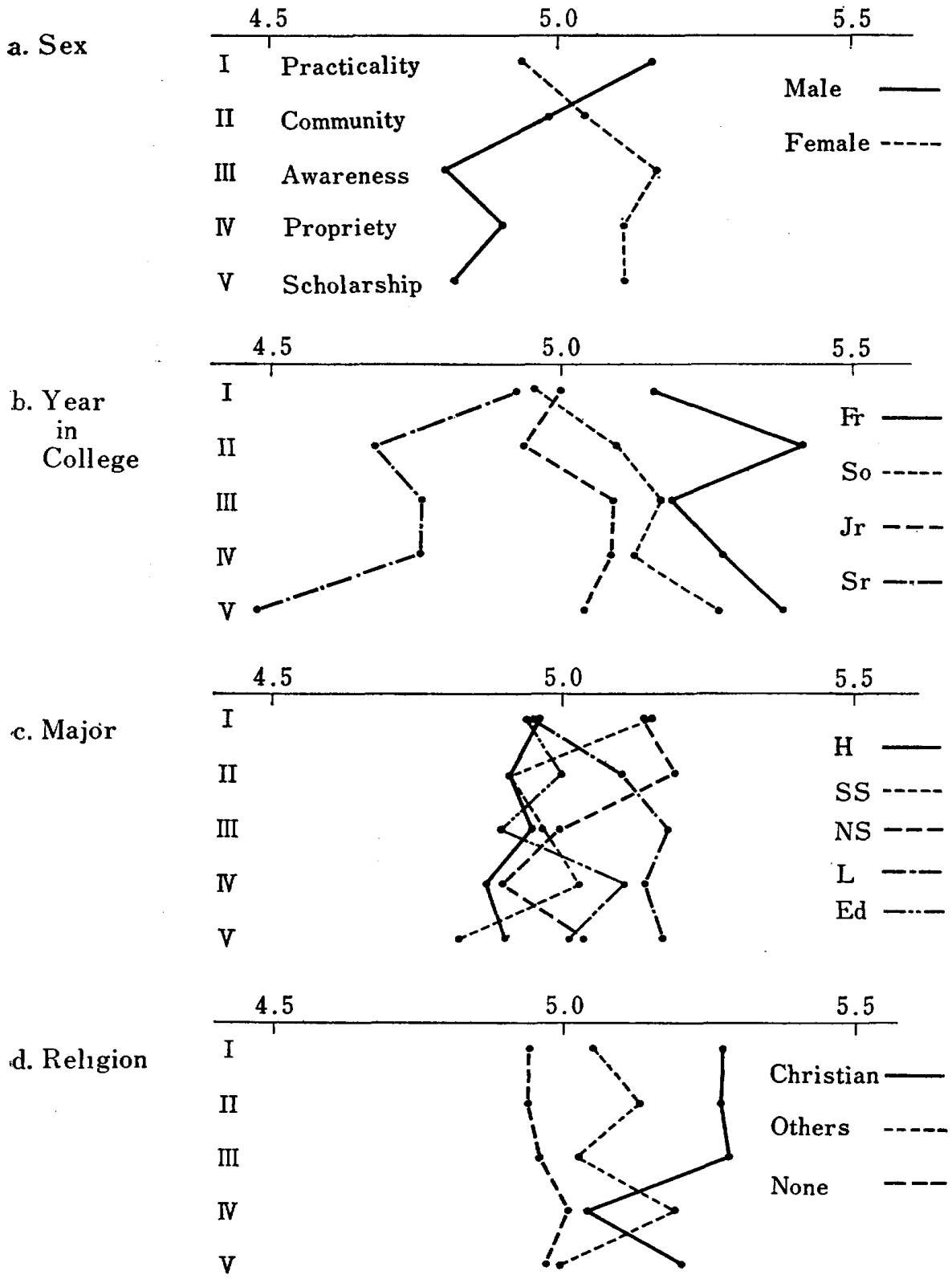

Fig. 2 Group Comparisons of Mean T-Scores. (a～d)

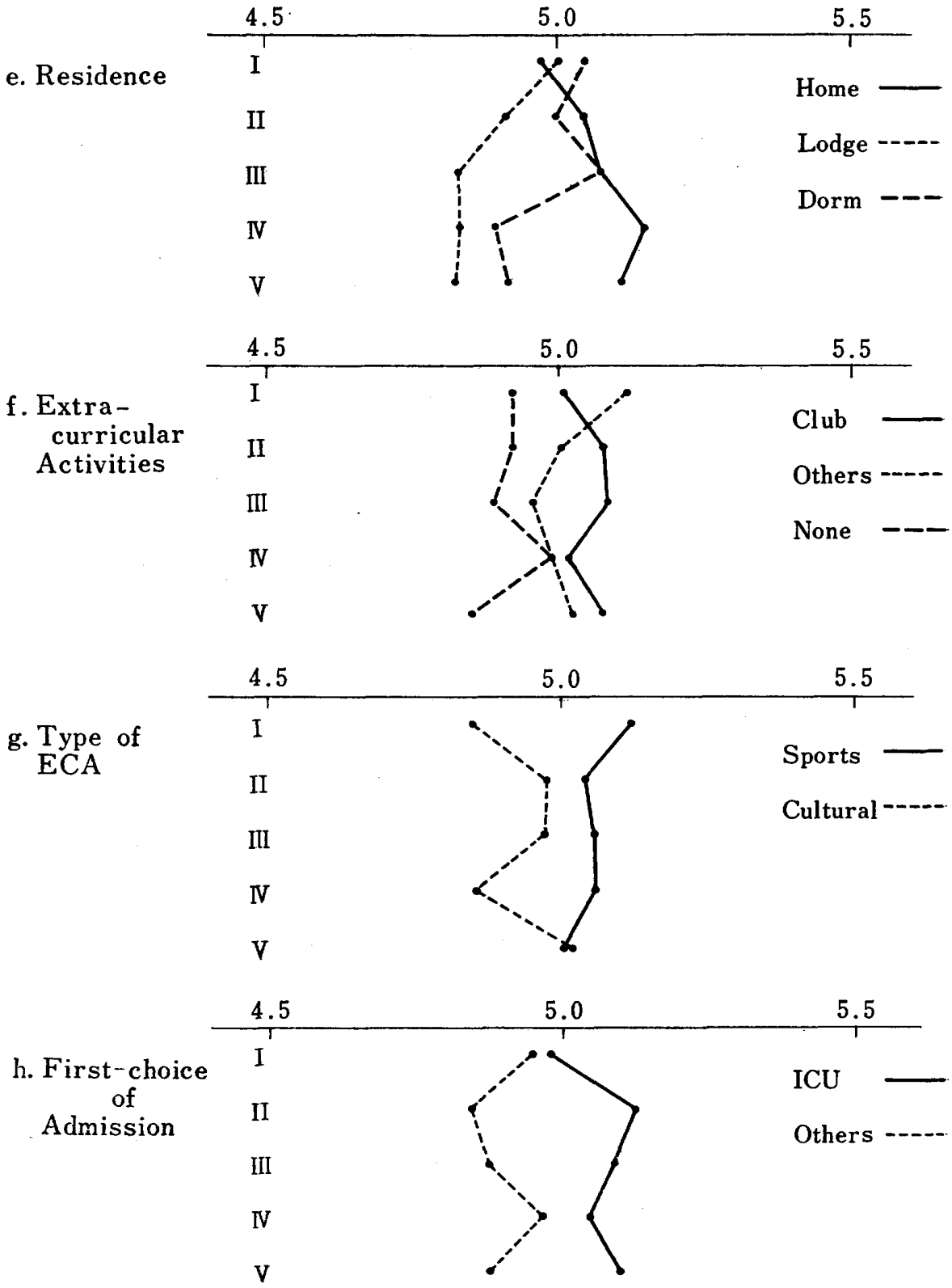

Fig. 2 Group Comparisons of Mean T-Scores. (e~h)

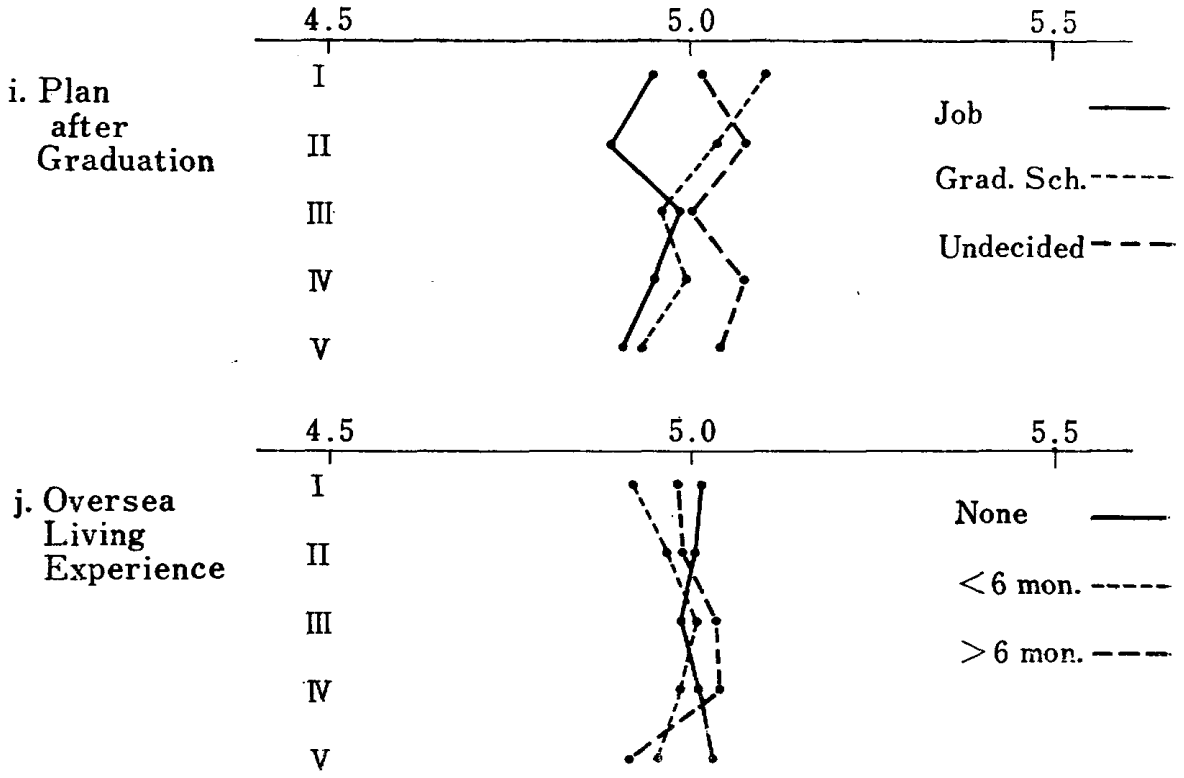

Fig. 2　Group Comparisons of Mean T-Scoses.（j & i）

半々であるにもかかわらず，本調査では圧倒的に女子の回答が多かった。このことはすべての結果を考察する際に，常に念頭に留めておくべきことである。また，調査に回答してくれたことそれ自体が，無回答者に比べ，被調査者たちがより積極的態度の持ち主であることを物語っていることも忘れてはならない。

先に述べた通り，ＪＵＥＥＳはＣＵＥＳを日本語に翻訳し，専らＩＣＵ向きに改訂したものである。このため，これら両者の間の等価性については疑問が残るであろう。すなわち，ＣＵＥＳが本来とらえようとする意味内容を，果して今回の被調査者に正確に伝えることができたか否か，また U. S. A. と日本の文化的差異をどのように調査結果に反映させているのか，本研究の資料のみでは結論が下せない。

今回は予備調査を施行せず，項目分析による改訂手続きなしに，単に face validity を基にしてＣＵＥＳの150項目を75項目にまで減じたが，このことによって，調査用紙全体ないし各領域における妥当性と信頼性に

Table 4. Significance Level of t-Test for the Comparison of Group Means at Each Scale

Subgroups	I	II	III	IV	V
Sex:					
Male vs. Female	* * *	*	* * *	* * *	* * *
Year:					
Fr. vs. So.	* * *	* * *		* * *	* *
Fr. vs. Jr.	* * *	* * *	*	* * *	* * *
Fr. vs. Sr.	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *
So. vs. Jr.		* * *			* * *
So. vs. Sr.		* * *	* * *	* * *	* * *
Jr. vs. Sr.	*	* * *	* * *	* * *	* * *
Major:					
H vs. SS	* * *			* * *	*
H vs. NS	* * *	* * *			*
H vs. L		* * *	* * *	* * *	* * *
H vs. Ed		*		* *	*
SS vs. NS		* * *		* *	*
SS vs. L	* * *	* * *	* * *	* *	* * *
SS vs. Ed	* * *	*			* * *
NS vs. L	* * *	*	* * *	* * *	* *
NS vs. Ed	* * *	* * *	*	* * *	
L vs. Ed		*	* * *		* * *
Religion:					
Christ. vs. Buddh.	* * *	* *	* * *	* *	* * *
Christ. vs. None	* * *	* * *	* * *		* * *
Buddh. vs. None	* *	* * *		* * *	
Residence:					
Home vs. Lodge		* * *	* * *	* * *	* * *
Home vs. Dorm.	*			* * *	* * *
Lodge vs. Dorm.		*	* * *		*
Extracurricular Activities:					
Club vs. Dokokai	* *	*	* * *		
Club vs. None	* *	* * *	* * *		* * *
Dokokai vs. None	* * *	*			* * *
Sports vs. Cultural	* * *		* *	* * *	
First Choice at Admissions:					
ICU vs. Others		* * *	* * *	* *	* * *
Plan after Graduation:					
Job vs. Grad. Study	* * *	* * *			
Job vs. Undecided	*	* * *		* * *	* * *
Grad. St. vs. Undecided				*	* *
Oversea living Experience:					
None vs. <6 mon.	*			*	
Non vs. 6> mon.					* * *
<6 mon. vs. <6 mon.				* * *	* * *

* : Significance level at .05
* * : Significance level at .01
* * * : Significance level at .001

多少の偏りの生じる危険はまぬがれなかった。しかし，Fig. 1の示すように，5つの領域とも得点の分布が正規分布の形を保っているので，基準としたCUES の内容と極似の構造を維持できたと考えられる。

回答方法については，より細かな弁別を試みるため4段階尺度を採用し，これによって，項目数の削減による検査の信頼性の低下は防ぐことができたと考えられる。しかし，回答方法の指示に従わない者もおり，中には資料に使用できない例もあって，指示の説明には今一層の工夫が必要である。今後，早急に質問紙の項目分析を行ない，わが国の大学の状況に相応しく新しい項目を加えて改訂を続けることは，JUEES にとって是非とも望まれる課題であろう。

JUEESの結果について

個人の平均値の分布（Fig. 1）：図より明らかなように，各領域ごとに得られた全被調査者の平均値の分布は，各領域ともにほぼ正規分布に近い形をとっている。全体的には，5つの領域の内，Ⅰ（Practicality）の得点が最も低く，Ⅳ（Propriety）とⅤ（Scholarship）が比較的高くて理想の平均値2.5に最も近い。しかし，一般的に評価得点はやや低目に出た。このような傾向についても，それがICUの学生の態度の特徴そのものか，あるいは質問項目の選択の偏りに由来するものかは，今直ちに判断することが困難である。前者については同じ調査用紙を用いて他の成員（例えば教職員や卒業生）あるいは他大学の学生がICUの教育環境を評価すること，後者については他大学の学生がそれぞれの母校を評価して，なお同じ傾向が出るか否かを調べることが，本調査紙の標準化には必要である。

性別の比較（Fig. 2－a）：領域Ⅰ（Practicality）においては，男子が有意により高く評価しているが，他の4領域では，いずれも女子の評価の方が有意に高くなっている。すなわち，学問的雰囲気（Ⅳ），礼儀正しさ（Ⅳ），個人的・芸術的・政治的方面についての関心（Ⅲ），ならびに大学内の親和的雰囲気（Ⅱ）は，男子に比べて女子の方がより強く認知してい

るといえる。

学年別の比較（Fig. 2-b）：全体的傾向をみると，上級学年になるに従い順に評価が下ってきている。領域Ⅱ（Community）とⅤ（Scholarship）において，4年生と1年生との間に大きな差が表われている。Communityにおいて1年生の評価が有意に高いのは，ＦＥＰの Section 制度によって学生間の接触が多いことも一役買っていよう。4年生でこの評価が落ちるのは，それぞれの専門領域で個人的研究が多くなることと，就職運動や卒業を控えて授業をあまり登録しなくなるためもあろう。また，Scholarshipにおいて1年生の評価が高いのは，大学に対する大きな期待感と強い勉学意欲によるためと思われる。逆に，4年生の評価が極端に低いのは，卒業や就職を間近に控え，学問研究より実際的な社会活動に関心が移るということと，自分たちの学問的達成の欲求不満を合理化しようとすること，また，4年間の大学生活を通して社会的成熟を遂げると同時に，すべての価値基準を低下させることなどが理由として挙げられる。いずれにせよ，この4年生の下位群の中に多くの大学院進学希望者が含まれていることを考えると，学年が進むにつれてＩＣＵの学問的雰囲気の評価が低下するということは，ＩＣＵの教育環境に大きな問題点のあることを示唆しているといえよう。

専攻別の比較（Fig. 2-c）：Awareness, Propriety, Scholarship の3領域において，語学科専攻生の評価が他の専攻生に比べて非常に高く，それに対し，人文科学専攻生は一般的にいずれの領域においても比較的評価が低い。語学科と社会科学科専攻生の傾向は，男女別の傾向と類似しており，専攻別の要因と同時に性差が反映されていると考えられる。Communityにおいて理学科専攻生が他に比べて高い評価を下しているのは，学生の人数が少ない上に実験演習などで協力し合う機会が多いためであろう。

宗教別の比較（Fig. 2-d）：Propriety を除いた他の4領域において，基督教，仏教や神道その他の宗教，無宗教の順に評価が低くなっている。Propriety においては基督者の評価が他宗教信者に比べて有意に低い。す

なわち，基督者の方が Propriety に対する欲求が強く，期待が高いためと考えられる。逆に他の宗教を持つ学生にとって，ＩＣＵ の Propriety 的雰囲気は決して低いものとは認知されていないようである。

住居別の比較（Fig. 2－e）：Practicality 以外の領域では，自宅通学生，寮生，下宿生の順に評価が低下している。Community においては，集団生活を営んでいる寮生の方が自宅通学生や下宿生より高く評価するであろうと予想したが，結果は寮生と自宅通学生との間に有意な差がなく，下宿生が両者より有意に低い評価をした。また，上と同じく Propriety と Scholarship についても，学園内で生活している寮生が図書館の利用や教授先輩たちとの接触の機会が多く，従って評価も高いと予測されたが，結果は自宅生よりも有意に低い評価を下していた。教育寮の名の下に建てられた学生寮のあり方を考える上で，一つの参考資料を供するものである。

課外活動別の比較（Fig. 2－f, g）：Practicality を除き，全体的にクラブ，同好会，無しの順に評価が低下しているが，Propriety においては群間に有意な差がなく，評価が似ていた。一般的にいって，大学のクラブでは先輩後輩の関係が厳しく，礼儀などが重んじられていると考えられているが，ＩＣＵにおいてはそのような習慣があまりないのであろう。また，スポーツ系と文化系の別を比較すると，Scholarship を除いては他のいずれの領域においても，スポーツ系のクラブ・同好会に所属する学生の方が文化系活動の学生よりも高い評価をしている。特に Practicality と Propriety において，スポーツ系の方が有意に高い。これは上で述べたことの例外としてスポーツ系の学生は常に登録手続きや入試準備など大学の実務的な面にも協力することが多く，また，部の中で上下の結び付きと先輩後輩の身分の差が強いことなどの理由が考えられる。

受験時の志望順位別の比較（Fig. 2－h）：ＩＣＵを第１志望とした学生の方が他大学を第１志望としていた学生よりも，Practicality 以外の領域を高く評価している。入学以前からＩＣＵに抱く態度は，入学後も左程変化しないことを示唆している。ここに表わされる差は，特に Community,

Awareness, Scholarship に顕著である。

卒業後の進路別の比較（Fig. 2－i）：就職志望者の評価が最も低く，未定者の評価が高い。これは，前者には4年生，後者には下級生が多く含まれているので，学年差の影響も反映しているであろう。卒業後，大学院への進学を希望する学生にとって，母校のＩＣＵが Awareness も Scholarship もそれほど高くないと認知されていることには，重大な問題がひそんでいるように考えられる。

海外在住経験別の比較（Fig. 2－j）：今まで検討してきた下位群間の差異に比べ，海外在住経験の有無による差はいずれの領域においてもほとんど見い出されなかった。ただ，Scholarship において，海外在住経験者がその経験のない人に比べてより低く評価している。このことは，ＩＣＵの学問的雰囲気についても，その国際性に疑問が投げかけられていると云えるであろう。

われわれの今後の課題としては，まず早急に調査用紙の改良を試み，日本の高等教育機関に広く利用されうるものへと改訂していくことが挙げられる。それと同時に，在学中の変化を追う縦断的研究や，他大学の教育環境との比較研究などが，今後ますます多くの協力者の手によってなされることを希うものである。

最後に，この調査に協力してくれたＩＣＵ教養学部学生諸君，ＩＣＵ計算センターの諸氏，ならびに，Dick-Hunter Memorial Fund に対し，深く感謝の意を表して，本報告を終る。

参　考　文　献

原　一雄「Ｖ．環境心理学の視座と使命」　望月　衛・大山　正編『環境心理学』朝倉書店　1979，287-300

原　一雄・中山和彦・星野悠子・岩瀬純一・土屋静子「大学教育の総合評価：その4・在学生，卒業生，教職員による学生生活の評価の比較研究」『教育研究』1972，16，35-54

原　一雄・渡辺幸一「大学教育の総合評価：その1．大学における学校評価と国際

基督教大学のための試案」『教育研究』1969，14，123-139

岩瀬純一・中山和彦・原　一雄「大学教育の総合評価：その２．ＩＣＵ在学生による学生生活の評価」『教育研究』1969，14，141-155

牧野文恵「教育環境についての一研究：パーソナリティー次元と教育環境評価の関係について」国際基督教大学教養学部学士論文，1978

松村治子「教育環境の調査研究：教育環境認知と生育環境及びＩＣＵの予備知識の関係について」国際基督教大学教養学部学士論文，1978

村山興子「教育環境の調査研究：大学生の価値志向と学園雰囲気の認知についての一考察」国際基督教大学教養学部学士論文，1978

Murray, H. A. *Explorations in Personality*, 1938

Pace, C. R. *College and University Environment Scale*, Princeton, N. J. : Educational Testing Service, 1969

Pace, C. R. & Stern, G. G., "An approach to measurement of psychological characteristics of college environments", *J. educ. Psychol.*, 1958, 49, 269-277

島田博美「教育環境の調査研究：ＩＣＵ存学生による教養学部の評価に関する一考察」国際基督教大学教養学部学士論文，1978

Troyer, M. E.・原　一雄・原　喜美・田中清彦「卒業生によるＩＣＵ在学経験の評価 —— 国際基督教大学創立25周年記念卒業生追跡調査報告（要約）——」『教育研究』1976，19，65-114

土屋静子・原　一雄「大学教育の総合評価：その３．卒業生による学生生活の評価」『教育研究』1970，15，49-85

A Survey Study of Educational Environment at ICU

Kazuo Hara
Fumie Makino
Haruko Matsumura
Koko Murayama
Hiromi Shimada

The purpose of this survey study was first to define the characteristics of campus atomosphere, or educational environment, of ICU, and secondly to detect any significant factors contributing to those characteristics by finding differences among groups of students varying in sex, year in college, major of study, religion, residence, club activity or oversea living experience.

In September 1976, "Japanese University Educational Environment Scales (JUEES)", a revised translation of the College and University Enveronmental Scale (Pace,1969), was distributed to all Japanese undergraduate students in the College of Liberal Arts at ICU, and 642 responses (about 48%) were collected. The questionnaire consisted of 75 statements about college life — features and facilities of the campus, rules and regulations, faculty, curricula, instruction and examinations, student life, extracurricular organizations, etc. These 75 statements were organized into 5 scales of 15 statements each. The 5 scales were (I) Practicality, (II) Community, (III) Awareness, (IV) Propriety, and (V) Scholarship.

Some outstanding and significant group differences revealed in this study were as follows:

1) Females evaluated higher than males in all scales but "Practicality."

2) Greater the length of campus living, lower the evaluation of their educational environment tended to be. The greatest decrement was in "Scholarship."

3) Language majors evaluated a little higher in most of the scales.

4) Christians were higher in all scales except "Propriety."

5) Commuting students evaluated "Propriety" and "Scholarship" higher than others.

6) Those who belonged sports clubs evaluated "Practicality" and "Propriety" higher than ones in cultural clubs.

7) Those who attempted to enter ICU as their first choice were higher in "Community", "Awareness" and "Scholarship."